
愛

春月桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛

【Zマーク】

Z8922

【作者名】

春月桜

【あらすじ】

一人の女子はある人に恋をする。

でも、それは決してしてはいけない禁断の恋。

愛してる。

その言葉はあなたのため。

あなたならどうしますか？

愛1（前書き）

ハイクションです。

ねえ、本当の「愛してる」を教えてくれたのは。

あなただよ？

ねえ、気づいてる？

出会い

君との出会いは縁が青々としていた季節だった。
どこからでも蝉の声が響いている。

小さい頃から体が弱い私は暑さにも弱い。
図書室から見える木があまりにも気持ちよさそうだから、甘
い蜜に誘われるよう引き寄せられた。
小さな木の木陰はとても気持ちよくて舟をこぎ始めたときだった。

「あれ？」こんな可愛い子いたっけ？」

聞き覚えのない声に耳がびくつと反応した。
なんて汚らしい声だろ？

ところどころかすれ、変なところで高音がする。

「ねえ、一人なら俺に付き合つてよ。」

男は誰でもいつなのか？と時々呆れる。

私は腕を掴まれた。

手の甲が太陽に当たつて熱く感じた。

「やめて。」

少し視界がグラッとしたのがわかった。
あ、ヤバイかも。

そんなときだつた。

「おい。」

私の腕をしつかり握つてゐる男の手を少しゴシゴシしてゐるのに、
爪がとても綺麗な手が男の腕を握つてゐる。

私はぼやける視界からはつきりと彼の姿を見つめた。
灰色のスーツに身を包み、眉毛に薄くかかる黒い髪の毛、目じり
が丁度よく上がつてゐる。
鋭く光つた瞳は男の目をしつかりと押さえた。

「新しい先校か？誰だよ。」

男はたじたじになりながら言葉を発した。

私は眉間に皺を寄せた。

ダサい男。

そう感じた。

「彼女は君より大人みたいだな？」

スーツの男は口の隅を上げた。

でも、目が笑っていないみたいで。

「は？俺、こんな女相手にしねえから。」

男はそう言って太陽でじんわりと温まっていた手を勢いよく離した。

私は力が抜けていたため自分の足で受け止めた。
そのときに小さいため息が出た。

男は逃げていくように走つていった。

「大丈夫？君、こここの生徒だよね？」

黒髪の先生らしき人は私の顔を覗き込んできた。
私は掴まれていたところを撫でながら頷いた。

「職員室に案内してくれない？」

私は綺麗な瞳を見つめた。

奥深い綺麗な黒。

整つた顔。

すらりとした輪郭。

笑つた顔が少し幼くつて。
くす。

私は少し笑つた。

本当に先生なのだろうか。

私はゆっくり立ち上がった。

「いじいちですよ。」

私は先生の方には向かずに歩きだした。
何故か後ろにいても安心する。

「君、本当に高校生？」

歩いている途中いきなりその言葉が後ろから聞こえた。その声は少し何かが抜けているような声だった。

「あたりまえじゃん。」

私は振り返った。

おかしな人。

私はそのまま口角を上げた。

「ふーん。先生をそんなふうに馬鹿にするんだ。」

先生も望むところだといつよつな顔で笑った。

「ひねくれものだからね。」

私はまた前を向いた。

この学校はとても広くて、移動教室はとても大変だと有名だ。ほとんどが綺麗で、新しいペンキの匂いが微かに香る。

私は高2なので何処に何があるかはほとんど把握している。新入生にはいい迷惑である。

そんなところにこの男がやってきた。

鮮やかに広がる蒸し暑い世界で、初めて居心地がいいと思つた。蒸し暑いはずなのに、桜が咲くような季節を思わせる。

この男は一体なにものなのだろうか？

私はきっとこのときにも気づいてた。

自分が変わっていくことが。
なのに、気づかないフリをしてたんだ。

だつて、私とあなたは…

愛1（後書き）

続きます。

決して許されない。

大きくて重い罪。

もし、あなただったらどうする？

本当の気持ち

「ただいま。」

いつでも暗い家の中。
冷たいフローリング。

電気をつけても、温かいとは思えない。

それは、私の心が冷たいから？

それとも、この家の広さ？

すべてが蒼く見える。

学校じゃ、友達もいる。
何よりも一人じゃない。

家中の一人なんてなれてるのに。

いざ、一人になると、やはり寂しい。

大きいソファの上で膝ごと体をまるめる。
全然温かない。

私は惨めになりながらゆっくつとテレビをつけた。

翌日：

朝礼である男は紹介された。

名前は東正聰介。とうせい そうすけ

整った顔はみんなに人気だ。

明るく気さくな性格らしい。

でも、たまにクールになるときが癖になると評判だ。

私も結構いい先生だなと思っていた。

人気になることなんて想像していた。

でも、少し残念に思っている。

何で？

私は自分の胸が苦しいのがつらかった。

「川風 美有香。この子って！！」

俺は驚いた。

なぜかつて？

そんなこと決まっている。

体育以外オールA。

体育はB。

「ああ、川風はすごいですよね。頭はいいですし、運動もできないわけではないんですけど…。ただ…体が弱いんですよね。」

俺の十歳くらい上をいつているおじいさん先生が苦笑いをしながら

らボソッとつぶやいた。

そういえばあのときも顔色があんまりよくなかったかも。

俺はあのときのことを思い出した。

白い肌。

緩くカールしている黒髪。

綺麗な黒と茶色が混ざった濃い瞳。

細い手足。

本当に人形のようだつた。

あんなに綺麗な子は初めて見た。

「ひねくれものだからね。」あの子の言葉が少しだけひっかかつた。

全然ひねくれてるもののよくな顔をしていない。
むしろ、誰よりも人のことを考えてるように思つ。

この子はどんな子なんだろう。

俺は写真を見ながら考えていた。

夜の1時を過ぎた頃。

いきなりだつた。

ガチャガチャツ

黒い生地に黄色の星がいっぱいりばめられているカーテン越しにその音がはつきり響いた。

私はつばを飲み込んだ。

体中が震えた。

でも、その音は聞こえなくなつた。

私は「風だ」と自分に言い聞かせた。
だって、そうしないと怖いから。

「Jのときにも気づいていればよかつたんだ。
鍵が開けられていたことを。

翌日…

私はいつものように学校に出かけた。
いつものように授業を受けて。
いつものように友達としゃべって。
なんにも変わったことはなかつたのに…

ガチャッ

私は目を見開いた。
リビングがグシャグシャになつていた。
吐き気がした。
息が止まつた。
体中が震えだした。
考えもしなかつた。
家があらわれるつてこんなに恐怖感がわいてくるんだ。
私は外に出た。
あんな家にいたら落ち着けない。
私はずつとふらふらした。

携帯を見たら、もう七時を回つていた。
夏だから、まだ周りは明るい。
まだ大丈夫。

また少しふらふらしている途中だった。
携帯を見つめた。

九時になつていた。

さすがに周りは暗くなつていて

どうしよう。

私はまだふらふらしていた。
あの部屋が頭から離れない。

寒気がした。
夏のはずなのに。

そんなときだった。

私の靴の音ともう一つの足音がした。

ドクンッ

胸が大きく脈を打つた。

血の気が一気に引いていったのがわかった。

私は早歩きをした。

でも、その音は一緒に速度で歩いている。

怖い。

その言葉が頭の全部を包み込んだ。

そのときだった。

ガシツ

いきなり腕を掴まれた。

体が大きく反応した。

「何で、こんな時間に一人でいるんだ？」

息を切らしながら聞き覚えのある声が私の耳にしみこんだ。

私は掴まれた腕のほうに振り向いた。

その瞬間腰が抜けた。

「あ、おい。」

地面に座り込んだ私の顔を覗きこむ東正先生。
私はホッとした。
涙が出てきた。

「どうした？何かあつたのか？」

先生は心配してくれている。
私は先生のスーツの袖を握った。
安心。
その言葉が私の体中に巡り回った。

「来い。」

先生は私の腕を掴んでいきなり先生の私物らしき車に連れ込まれた。

「東正先生？？？！－！」

私は焦りながら先生を呼んだ。
でも、先生は何も言わずに車を発進した。
驚いたけど。
でも、すごく落ち着いた。
この人が近くにいると。
目に映る世界が変わる。
そんなふうに外を眺めているうちについついこの間にか、どこかのマンショングに着いた。

私は首を傾げた。
その光景を見てか。

「ここは俺の家。安心しろ襲つたりしないから。」

その先生の顔はどことなく真剣だった。
数日見た先生の顔つきと全然違つた。
陽気に笑つてることが多いのに。
月の光に照らされた先生の髪の毛は艶を放つた。
綺麗。

私は見とれていた。
そんな私に先生は気づかないまま歩きだした。

私は先生の広い背中を見つめながら、ついていった。

「入れ。」

先生は笑みも浮かべずにそう一言発した。
部屋は片付いていて、あまり物がなかつた。

茶色い暖かな光が私を包んだ。

温かい。

そう感じたときには自然と頬を涙が伝つた。

「何があつたか言ってみろ?ちゃんと聞いてやるから。」

先生は私のことを大きい体で包んだ。

温かい。

私は先生の背中に手を回した。

「本当は…怖いよ。寂しいよ。」

いろんな言葉があふれ出した。
何が私をこんなにしたんだろう?
私ってこんなに弱かつたんだ。
先生は頷いてくれた。

「うん」

その声がとても優しくて。

その声がまた涙を溢れさせた。

温かいぬくもり。
それは、決して許されない恋の鍵。

続きます。

もうもどれない。

私の思い、気づいたよ。

あなたは？

二人の関係

俺はついさっきまでしてはいけないことをしていた。
教師として、最低だ。

生徒に手を出すなんて。
それに、思つてもなかつた。
まさか。

君を好きになるなんて。

私は小さい頃から一人だつた。

お父さんやお母さんは仕事が楽しくてしょうがない人達。
一人ともカメラマンで世界中を飛び回つている。

あまり日本の仕事はないから家にいることがほとんどなかつた。
お父さんとお母さんはすぐ仲がよくて、家族思いのことでもすぐわかつてた。

だから、言えなかつた。

「私は平氣だよ。」

そう言つしかなかつた。

心配なんてさせたくなかつたし。

なにより、二人の夢が私のせいで壊れることが怖かつた。
体が弱いことだつて、隠してきた。

私は楽しそうに生活してゐる一人が大好きだから。
全部隠すつもりだ。

先生に全部を話した。

先生は呆れた顔をした。

「本当に人のことしか考へないんだね。」

先生はそう言つてまた優しく抱きしめてくれた。
頭を撫でてくれる手の平は大きくて今までに味わつたことのない
あたたかさだつた。

家族とはまた違う。

友達とも違う。

またそのあたたかさに涙が溢れた。

あの木が私を誘つたのはこの人に会わせるためだつたのかな?
だつたら、あの木に感謝しなくちゃ。

だつて、初めて思つたんだ。

一緒だつたら、世界の色が鮮やかに変わるものと出会わせてくれた
から。

でも、何で。

先生なの?

もつと他にあつたでしょ?

あの木は私に同情でもしたの？

私はどうしたらいいの？

どうしたらいい？

先生。

好き

最近は先生の家を借りている。

あの家で盗まれたのは私の下着などだった。先生方や、警察がいうにはストーカーらしい。

でも、追いかけられているなんてこと無かつたはず。気づかなかつたのかな？

私は首をかしげた。

私の様子を見ていたようで先生は呆れていた。

「お前つて以外と鈍いのな。」

私は苦笑いをした。

みんなに「時々天然だよね。」といわれるのにはこいつのもあるのだろうか？

嬉しいよつな嬉しくないよつな…

複雑なまま生活をしています。

でも、この頃は周りでは何も起こらない。

何故かそれが。
すごく怖い。

嫌な予感が胸をよぎる。

そして、当たつたんだ。
その予感が。

ある日。

「川に川風 美有香はいるか？」

先生方に拳銃を突き出す男。

そんな男に先生方は真っ青な顔した。

ガラツ

いきなり開いた扉にみんなが目を移した。

「川風はいるか！――！」

拳銃を持つている男がそう叫んだ途端。
みんなが恐怖の顔に変わり叫び声もとじれりどじれで聞こえた。
私も驚いた。
でも、どこか冷静だった。

なぜだろう？

私はゆっくりみんなの前に出た。

「私に何か？」

私は落ち着いてそう尋ねられた。

何故か、目に見えていたのかもしれない。

この男が来ることが。

「俺と付き合え……そつすればみんな死なないですむぞ……」

男は顔を隠しているからよくわからないけど。

私より少し年上のような声をしていた。

「私を好きなら私の幸せを考えてください。こんなことしたって私
はあなたのことを好きになんてならない。私の大切な友達を傷つけ
るようなことをするなら、私はあなたを訴えます。」

私は目を鋭く光らせた。
こんな男怖くない。

何故？

「撃てるもんなら撃つてみるよ。」

いきなり聞き覚えがある声が聞こえた。

私の安心はきっとこの人だ。

ずっと心にあつたんだ。

あなたがここに来てくれるって。

「撃てるのか？手震えてんじやん。」

先生は気味悪い笑顔をしていた。

覆面をかぶった男を馬鹿にするような笑顔だった。

「俺が撃つてやるよ。」

先生はゆっくり近づいた。

その反応に男は今度は先生に拳銃の先を向ける。

「先生危ないよ！……」生徒みんなの声がそう叫んだ。
私は危ないなんて思わなかつた。
だつて、私が助けるんだから。

ガンッ

私は男の頭を思いつきり蹴つた。
その途端教室の床に拳銃が落ちた。

「ナイス。やつてくれると思ったよ。」

先生は笑いながら落ちた拳銃を手に取つた。
私と先生は顔を見合せた。
信じてた。

だつて、信頼できる人だから。
たつた一人の大切な人だから。

この件は誰も怪我をすることもなくすんだ。

きつと先生の言葉がきいたのだ。

先生は最後に男の耳元で囁いた。

「今度川風に近づいてみな。そのときは容赦せずに息の根止めてやるよ。」

すぐ怖い顔で笑つた。

私は一人教室に残つていた。

茜色に染まつてゐる教室は、あたたかかつた。
明日の日付が書かれてゐる黒板。
みんなの字がいっぱいの掲示物。
使ひたての机とイス。
見るものがすべて輝いて見えた。
あたたかい。
ついせつきまで騒ぎがあつたことなんてなかつたことのよつて感じ
じられる。

ガラツ

「まだいたのか。」

その人の声で胸があたたかさで溢れしていく。
この人が私を変えてくれたのかもしれない。
そんな気がした。

「居残りつて楽しいね。」

私は外を眺めながらそつぶやいた。
外では、みんなが一生懸命汗を流しながら部活をやつていて
教室には吹奏楽部のいろんな音色が響いている。

「いつも学年トップのお前には無理だろ？よ。」

その言葉に私は笑った。

すごくおかしい。

私は学年トップを守り続けたけど。

それはただ、暇なだけなんだ。

「そんなこという人初めてだよ。」

先生を見つめながら微笑んだ。

みんなは「すごい」「さすが」とかいう言葉しか言わなかつた。

みんなとどこか違う。

すごく嬉しかつた。

そんなふうに褒めてくれた人は誰一人いなかつたから。

「本当に高校生とは思えないな。」

先生は耳を真っ赤にしていた。

先生は照れたら耳が赤くなるんだ。

私は笑つた。

先生のことが一個知れたような気がした。

少し選民意識を感じた。

「先生耳真っ赤。」

「黙れ。」

こんな言葉を交わしながら先生が隣に座つた。

先生は真っ直ぐ私を見つめる。

私もそれに答えるように先生を真っ直ぐに見つめる。

「何か用ですか？」

私は笑いながら尋ねた。

先生に心臓の音が聞こえそうだったから、紛らわす。

「言いたいことがあるのはお前じゃないのか？」

先生が微笑んだ。

その表情に私の胸は大きく鳴つた。

「私、先生のことが好き。」

ねえ、先生は？

先生、泣いてもいい？

もう無理だよ。

裂け目

俺は生徒に告白された。
それもきっと、真剣だ。
俺もその目が好きだ。

髪も好きだ。
手も好きだ。
白い肌も好きだ。
全部好きだ。

でも

「俺とお前は教師と生徒だ。」

この言葉が邪魔をする。
そんなこときつとこいつだつてわかつてゐはずだ。
触れられない距離がすごく辛かつた。
遠い気がした。

「わかつてゐるよ。困らせていいめんね。先生。」

あいつは逃げるよつて教室を出た。

俺は拳を握つた。

爪の先が白くなる。

ごめん。

机を蹴つた。

俺にはもうすまむことしかできない。

本当に元氣めん。

触れられない。

涙をふいてやれない。

ごめん。

生徒として、愛してやるから。

だから、泣かないでくれ。

私は走つた。
ただでさえ泣いていて息をじびりいのこもつと息が上がりて苦し
い。
でも、それよりも胸が苦しい。
胸が締め付けられている。

バンッ

思い切り家に入った。

先生の香り。

愛しい。

その思いしかなかつた。

最初にあつたときからこうなることなんてわかつてたはずなのに。
何で、あんなこと言つちゃつたんだろう。

先生ごめんね。

先生も辛いよね。

困らせてごめんね。

先生に甘えてばっかりなこと。

私は先生の家を出た。

これ以上は迷惑なんてかけられないよ。

俺は家に帰つた。

入つた途端にわかつた。

全部が違う気がした。

俺は走つた。

息なんか切れたつていい。

足が痛くなつてもいい。

怪我したつていい。

あいつが俺の近くにいてくれれば。

俺は最初から気づいてた。

お前を好きになる」となんて。

「ううだ。

川風。

きつと泣いてる。
行くあてなんかないくせに何で出て行くんだよ。
そんなときだった。

ギュウ

「やつと見つけた。」

俺は息を切らしながらつぶやいた。
伝えるんだ。

こんなに思ひませじ人を愛したことはない。

「優しくしないでください。」

川風はきつと泣いているのだろう。
鼻声をしてくる。

「うめんな。」

「先生、うめんな。私、先生に振られても、嫌いになんてなれない
よ。」

今にも消えそうな声はとても切なそうだった。
どうして、俺は教師なんだろう？

「嫌いになんてならないでいい。好きでいてくれ。すごい、自分勝

手だけど。俺もお前が好きだ。でも、そしたら、苦労するだ？』

俺は川風の耳元でそう言った。

ただ、怖かったんだ。

川風が俺を好きでいてくれるか。
すれ違つことが多くなりそうで。

でも、違つたんだな。

川風は首を横に振つた。

「先生と一緒に何も苦労すことなんてない。」

俺は思い切り抱きしめた。

泣きながら俺に気持ちを伝えてくれた川風が。
すぐ愛しくて。

いつも周りしか見なくつて。

自分の気持ちをうまく言えなくて。

でも、何でも一生懸命で。

「好きだ。」

もう何年ぶりだろう。

頬に伝づ涙の感触。

君をどうして好きになつたのだろう?
出会つて少ししか経つていないので。
いつからか田で追うよつになつっていた。
なあ、本当に俺でいいのか?

苦労でもいいの。

あなたと一緒になら。

きつと笑える思い出になるから。

だって、先生じゃなきゃダメなんだよ？

恋心

「おはよう東先とうせん！！」

みんなに人気で廊下ですれ違つたびに声をかける。

私の恋人。

でもね、私の特別な人なんだ。

「お、川風。おはよう。」

先生からの言葉がいつも優しくて。

学校では、普通に。

でもね、やっぱり寂しいんだ。

「おはよう。先生。今日も人気だね。」

私は笑つてやつと云つたが。

本当はね。

本当は先生に触れたいよ。

「また後でな。」

いつも少しの会話だけど。
きっと先生には伝わってるはずなんだ。
だから、信じるよ？

ある日。

私は帰るときに声をかけられた。
見知らぬ男。
その男は金髪で耳には黒いピアス。
首には光るネックレス。
チャライ男といつのはまさにいつことをいつのだらげ。

「何がよつ？」

私は眉間に皺を寄せながら尋ねた。
人相の悪い奴。

「お前俺と付き合へ。付き合わないつて言つのなら、ぱらしてやる
よ。お前と先校のこと。」

いつのを脅迫といつのだらつか？

男は笑みを浮かべた。

私はため息をついた。

「いいよ。別に。ただ、あんたみたいな奴絶対好きにならないから。

」

私は目を鋭くした。

こんなので負けてたら、先生を好きでいる資格がないようなもん
だと思つ。

「ふーん。つまんねーやつ。」

この男は一体何が言いたいのだろうか?

私は目を細めた。

でも、どこか寂しそうな気がした。

私達はいつも一緒に帰るよつになつた。
でも、こんな奴を好きになるわけはない。
それに、なぜかこいつも私を好きといつ『気持ちは無さやつだ』
でも一体なんで?
そんなことを思いながら歩いていたら。

「あれ?蓮治?隣にいるのって新しい彼女?よかつたねー。」

一人の可愛らしい女の子が首を傾げながら尋ねてきた。

蓮治?

「いつそんな名前だつたんだ。

「ああ、まあな。お前は新しい男と仲いいのか?」

「いつもいつもも冷たいと思つてた。

でも、その子の前では顔がすぐ優しくなつたような気がした。

「うん。ラブラブなの～。」

少し甘い声だった。

私と正反対のような気がする。
そう思いながら見つめていた。
そして、すぐこさよならしていった。

「俺帰るわ。」

女の子の背中を寂しそうに見つめながら帰ろうと歩き始めた蓮治。

「まだ、あの子のこと好きなら私となんか付き合つたって意味ない
じゃん。それとも何？あの子が嫉妬してまた自分に戻つてくれ
るとでも思つてたわけ？」

私は帰ろうとして動き出した蓮治の背中に言つた。

蓮治はきつと泣いているのだろう。

今までにきたこともないほど弱い声だつた。

「かもな。」

ギュッ

私は蓮治を抱きしめた。

蓮治を好きになんてならないよ。

ただ、先生が教えてくれたんだ。

「無理しなくていいんだよ？」

先生。

今日はだけは蓮治を慰めてあげたいんだ。
ごめん。

涙が私の首筋に落ちた。

冷たいけど、温かい。

人はこんな涙も流すことができるんだ。

先生。

私だって、こうなつてたのかもしれない。
でも、今はちゃんと先生がいる。

大丈夫だよね？

きつと大丈夫。

だつて、隣にはあなたがいるから。

ねえ、そうでしょ？

事情

あの出来事があつた翌日…

「俺マジで頑張る。他に好きになれる人探すから。ありがとな。」

蓮治は笑いながら私にそう言った。
案外可愛い人なんだなと感じた。

「きつと大丈夫だよ。」

私は笑顔でそう言つた。

「あんなところであんなことするなんて一 股？」

低い声が耳に響く。
「の姉は…

「先生。あれは事情があつて…」

私は振り向き焦りながら言い訳をした。
怒つてゐる。

「ふーん。まあ、そんなところだとまよひ思つたけどね。」

すこい冷たい態度。
でも、わかるの。
声が優しいから。
なんでも大きく包んでくれる。

「先生。『じめんね。』」

私はうつむきながら謝った。
本当に『じめんね。』
でも、先生の怒つてゐる顔も可愛ことと思ひちやう。
それぐらい。
すこく愛しこよ。

「謝るとおせむかやさんと皿を見ひ。」

先生は微笑みながらひと言つた。
なんでだろ? うね?

「『じめんね。』」

どうして、涙が出るんだろう？

髪の毛に温かい手が乗つた。

本当は抱きしめて欲しい。

四
六

やつはり先生と生徒なんだね。この距離が辛いよ。

「もういいことだから泣くな。」

優しい声にまた涙が出てくる。

言いたいよ。

好き。

「またな。」

先生はそう言つて私の横を通り過ぎた。

胸が締め付けられた気がした。

ねえ、どうして、私と先生だけで出来っちゃったのかな？

たのかな？

「うんなどうに逃げやがって。」

一人の男がつぶやいた。

その男は鋭く光る瞳をしていた。

「本当にここにいるのか？」

その男は一人のガードマンに尋ねた。
ガードマンは大きく一回頷いた。

「待つしかねえーな。」

男は退屈そうに言葉を吐いた。

先生。

優しくさるよ？

先生？

泣いてもいいよ？

先生は悪くないよ。

ねえ、一人でそんなに背負い込まないでよ。

すれ違つていた過去

私は歩いてる途中だつた。
丁度学校から出たとき。

いきなり腕を掴まれた。

振り向いた先には一人の男が立つていた。
男は目が光っていたような気がした。

「お前が、川風 美有香？」

男にそう尋ねられて私は少し驚きながら頷いた。
男は誰かに似ていると思った。
でも、あまりわからなかつたんだ。

「Jのときに気づいてればよかつたのかな？」

「Jたちへ来い。」

いきなり掴まれた腕を引っ張られた。

私は抵抗した。

声は出したくないから後ろに体重をかけた。

「安心しろお前には何もしねえーよ。」

その男は乱暴にそう言った。

じゃあ、何でいかなきやけないんだと思ったが…

連れて行かれたのは倉庫みたいなところ。

周りが薄暗くて穴の開いた天井から光が少し漏れていた。

「そ、あいつに電話でもするか。」

男は笑った。

その笑った顔は決して嬉しそうではなかった。

不気味な笑み。

その笑みは鳥肌がたつた。

「今すぐ、〇〇倉庫に来い。お前の大事なもの預かったからな。」

男はそれだけ言って電話を切った。

その言葉でわかつた。

誰に似ていたかも。

「あなた先生の何？」

私は真っ直ぐに男を見つめた。

その男は少し驚いたがまたあの笑みに戻った。

「あんなやつが先生なんて呼ばれるなんてな。お前の田もじうにかなつてんのな。あんなやつより俺のほうがよっぽどましだる。」

男は偉そうにイスに座った。

イスでわかつたことが一つ。

どつかのお坊ちゃんらしい。

艶やかなこげ茶色に金や銀の綺麗な糸で刺繡が施されたクッシュョン。

その上に足を組みざつかりと腰を下ろしていく。

金持ちがそんなに偉いのかと文句を言いたくなるような仕草だった。

「あんたみたいなチャラチャラしたやつよつよつぜじ眞面目だと思つけど?」

私は笑いながら嫌みを言った。

昔からひねくれ者に化けるのは得意だ。

男の眉毛の外がピクッと動いた。

そんなときだった。

「おい……」

いきなり先生の声が聞こえた。

こんなに早くここがわかるなんて。

すごいな。

私は少し呆然とした。

「久しぶり。何年ぶりだろうね。兄さん。」

男の口から出た言葉に耳を疑つた。
今、兄さんって言つたよね？

「驚くのも無理ないよね。この人には東正 孝介じゅうすけって言つ弟がいる
なんて聞いてないもんね。」

男は確かにどこなく先生に似ていた。

でも、何も話し方や、笑い方は何一つ似ていなかつた。
やつぱり、何かをうらんでいる顔に見える。

「ま、言えるわけないか。自分には重いからつて俺に全部押し付けて逃げてきたんだからな。」

男はどこか壊れたようにそう言い放つた。
怖い。

少しだけそう感じた。

「川風。行くぞ。」

先生は私の手をとつてそう言った。

「おい。シカトしてんじゃねえよ。」

男は眉間に皺を寄せた。
鋭く光る瞳。

先生は全く動じなかつた。

「俺の気持ちも知りずに出て行きやがって。」

男がそう言つた途端に先生の歩いていた足がピタッと止まった。

男はその光景を見て少し動搖した。

「お前には俺の気持ちがわからぬことなことが言えるんだ。
本当は俺だつて、あの会社を受け継ぐ覚悟はしていた。そして、親
父にも可愛がつて欲しくてずっと頑張ってきたんだ。なのに、いつ
も親父はお前ばかりで、俺のことなんて見向きもしなかつた。」「
お前は兄だろ?」その言葉ばかりで、俺が甘えたくとも甘えら
れなくて。だから、俺は逃げた。俺は必要とされたかった。でも。
誰も俺を見てくれなくて。お前なんかにその悔しさがわかるかよ!」

「!」

先生の見たことのない顔がとても悲しそうで。

私は先生の手を強く握った。

先生?

私がいるよ?

先生はそれに気づいたみたいで私の頭を優しく撫でてくれた。

「は? だつて、こつも父さんは兄貴ばかりで……」

「あれは、ほとんどがお前の話だ。元気でやつていいかとか、怪我
などしていいかとか。」

先生は冷静に言葉を発した。

その言葉に男は睡然としていた。

そして一回ため息をついた。

「これまでの恨みはなんだつたんだよ。」

男はそつとあの高級そうなイスにまた座りなおした。
男は頭をかき、しばらくして。

「兄貴。悪かつたな。」

そう言い残して、倉庫みたいなところから出て行った。

「兄貴だつて。何年ぶりだる。」

声が少し震えていたからすぐに気づいてしまう。
先生のことを後ろから強く抱きしめた。
泣くほど嬉しかったんだね。

泣いてもいいよ。

私が隣にいるから。

どんなに辛かつたかなんてすぐにわかるよ。
だって、大切な人なんだから。

「先生、来てくれてありがとう。」

私は優しくそう伝えた。

先生はその言葉に無言で頷いてくれた。

先生。

私は何があつてもあなたの隣にいるよ?
好きだよ。
初めてなんだ。

こんなに思えたの。
この気持ちは誰にもあげたくないよ。

お母さん。

お父さん。

ありがとう。

愛

私はいつもと変わらない日々を過いでいていた。
相変わらずの先生の家。
でも、この日は変わったことが起きた。

ブー……ブー……

いきなり携帯のバイブが鳴った。

私は躊躇することなく携帯を開いた。

「お母さんだ……！」

そこには何ヶ用ぶりかわからないほど懐かしい文字だった。
急いで通話ボタンを押した。

「もしもし? ? ! !

私は元気に電話に出た。
すごい久しぶりの電話。

最近は特に忙しかつたらしく全然メールもしていなかつた。

「あら、元気みたいね。」

懐かしい声に今にも泣き出しそうになつた。
すごく大好きなお母さん。

いつも傍にいなかつたけど、必ず胸の奥にはいてくれた。

「うん！……仕事順調なんだね。」

顔がどうしても緩む。

あたたかい。

そう思えた。

「ええ、忙しいくらいね。でも、嬉しいわ。お父さんもいるしね。
仕事に間ができたから明後日、家に戻るからね。」

お母さんの一言に呆然とした。
え？

「え？待つて？明後日？」

私は頭の上にはてなを並べた。

「ええ。明後日よ。ちゃんと片付けてね。それじゃあねー。」

お母さんは強引に通話を切つた。

なんて母親なんだろうか。

いつも突然だから困る。

家はきっと泥棒が入ったままかもしれない。

それに戻るの怖いな。

お母さんにどう説明しよう。

それに先生には?

どうしよう。

私は色々と考えていた。

ガチャツ

「ただいま。」

先生が帰ってきたらしい。

どう説明しよう。

やつぱりあの家に戻るか。

あ、でもそういうえば、先生があの家の鍵預かってるんだっけ?
どうしよう。

「ん? どうしたんだ?」

先生が私の頭に手を置きながらそう尋ねてきた。

優しくてあたたかい先生の手。

大好き。

すく頼りがいのある先生にはやつぱり話せりやうもので。

「先生。明後日にお母さん達が帰ってくるの。でね? 一回あの家に
帰ろうと思って。」

私はうつむきながらうつ語った。

本当は帰りたくないんだよね。

怖いし。

でも、お母さん達が久しぶりに帰つてくるし。

「本当は家に帰りたくないんだろう?..」

先生の言葉に小さく頷いた。

「でもね。お母さん達が久しぶりに帰つてくるから...」

私、今どんな顔してるだらう。

先生。

わがままだらうめんね?

「川風。俺と結婚する気はないか?」

あまりにも突然の言葉に睡然とした。
目が点になっていたかも知れない。

「やつぱり考えたことないよな。」

寂しく笑つた先生に私は思いつきり首を横に振つた。

ねえ、先生?

今の言葉もう一回語つて?

「私でいいの?だって、頼りがい無いし、年齢違つし。」

私ね。

本当はすぐ不安だったの。
年齢つて大きな壁があつて。
いつしか乗り越えられない壁になりそうで。
でも、今の言葉で壁が全部消えていった。

「お前がいい。つうかお前しかいないんだよ。」

私の体」と大きく包み込んでくれる先生。
愛ということを教えてくれた。

「じゃあ、明後日はここに呼べ。俺から話をしてやる。」

当曰…

「何でもっと早く言わなかつたのよ……美有香。心配もしてやれな
いなんて親として失格じゃない。」

先生に家の説明されてやはり落ち込む親達。
だから本当は言いたくなかった。

「お母さん達が大事にしてた家だから。」「

私は小声でさりげなく言つた。

「家よりあなたが大事よ……！」

お母さんは怒つていて泣きそつなよくわかんない顔で私を怒つて
いた。

本当に愛されてると感じられるのはやっぽり先生がいるからもあるのかもしれない。

「すみません。うちの娘が居候してしまって。」

お母さんは頭を深く下げた。

そして、何故かお父さんは無言で頭を下げない。

私はその変な様子のお父さんを見つめた。

「全然。いつもおこしごと飯を作ってくれるのでとても感謝しています。それはいいのですが。あのお母様とお父様にお伝えしたことがあります。」

先生が真っ直ぐにお母さん達を見つめて話しかけたときだった。

「娘はやうござ。今の教師は生徒に手を出すのか。」

一言もしゃべらなかつたお父さんが口を開いた。

お父さんは見たこともない顔で先生に言葉を突きつけた。

「すみません。でも、必ず幸せにしてますから。」

先生が深く頭を下げた。

私はじつとしていられなくて。

「お父さん……。」

私はお父さんに必死で呼びかけた。
わかつて欲しい。

お父さんとお母さんみたいな夫婦になりたいの。

でも、それは先生じゃないといけないんだよ。

「お前達が夫婦にでもなつてみる。世間に白い目で見られるんだぞ？！そこのどこが幸せだと言うんだ。好きな人がいるから大丈夫なんて甘い考えは通じないんだぞ！！！」

お父さんの言葉が胸に突き刺さつたことがすぐにわかった。
わかるんだ。

お父さんが心配なのは。
でも、誰にも譲れないんだ。
先生へのこの気持ちは。
いつまでも冷めることなんてない想い。

「私は」

私が話そうとしたときだつた。

「あなた、認めてあげましょうよ。この子が決めたことでもあるの
よ。いいじゃない。ちゃんと支えてくれる人が傍にいて。この子の
体も心配でしょ？」

体？

私は驚いた。

「お母さん達。私が体弱いの知つてたの？」

私は目を見開いた。

完璧に隠してきたつもりだった。

先生にだつて気づかれないようにしてたのに。

「先生からいっぱい話を聞いたわよ。時々ふらふらしているときがあるとか。元気がないときが多くあるとか。あなたが一生懸命私達を心配させなこよつて隠してたの全部知ってたのよ。」

頬に涙が伝つた。

瞼が熱くなつた。

鼻の奥がツーンとした。

「じめんね。辛かつたよね。」

お母さんが優しく抱きしめてくれた。
温かくて、懐かしい香りがした。
私はお母さんを抱きしめ返した。

「お母さん。ありがと。」

私は鼻声でやうやく言つた。

お母さんはその言葉に一回頷いた。

そして、お父さんを睨んだ。

「認めるわよね。」

お母さんは鋭く言つた。

お父さんはため息をつきながら。

「勝手に元気。」

お父さんはふてくされた口をとがらせた。

でも、どこか優しい口調で。

本当に嬉しかった。

「娘をよろしくお願ひします。」

お母さんが先生に深く頭を下げた。

親に認めてもらえる婚約はとても嬉しい。

誰よりも隣で支えたい。

笑つたり泣いたりしたい。

その想いは伝わるみたい。

ねえ、先生。

きっと先生が隣にいるならすごく幸せだらうね。

もつと。

もつとあなたを知りたいよ。

切なくて。

愛しくて。

大切で。

愛を教えてくれた先生。

愛してるよ。

幸せ

今は家で外を見つめてる。

吐く息が白くなる季節のある日。

明日から冬休み。

生徒はウキウキ。

目を輝かせてスケジュール帳を見つめる女子達。

私は結構うまっている。

でも、そのスケジュールの中にはとても大切な日がある。

先生の両親に挨拶に行く日。

赤いペンで書き足した。

両親はどんな人なのだろうか。

でも、先生と弟が美形なんだからやつぱり美形なのかな？

怖くない人だといいな。

そんなことを色々考えていたときだった。

「何ボーッとしてんだ？」

先生が私の後ろから声をかけてきた。
今日は日曜日なので、先生も家にいる。
私は微笑んだ。
こんなに人を好きになれるんだ。

「先生の両親のこと考えてたの。」「

その言葉を先生が聞いて首をかしげた。

「普通だぞ？期待しないほうがいいぞ？」

先生は呆れながらそう言った。

私は「そうかな？」というように顔をしかめた。

「なんだその怪しいと言ひたげな顔は。」

先生は眉間に皺をよせた。

私はふてくされた。

「お前本当に表情豊かになつたよな。」

先生から出た一言。

私は首をかしげた。

でもね。

やつぱり楽しみなのは変わらないの。

どんな人でも認めてくれるよつた気がするんだよね。

先生が私の頭を撫でた。

優しいぬくもり。

私は先生の腕の中に飛び込んだ。

先生の香りがとても愛しい。

当日…

私はガチガチしていた。

「あんまり緊張しなくても……。」

だつて…

緊張しないでいるほうがおかしい。

生徒が先生の実家に嫁になりますなんて言いに行くのだから。
どんなに場違いかが一目で目につく。
ましてや先生のお父さんは会社の社長なのだから。

「さあ、着いた。」

私の心臓はピークに達してきた。
何度もつばを飲む。

「あら。すいと懐かしいじゃない。もうしっかり大人なのね。」

普通より少し大きな一軒家の庭で女人人が声をかけてきた。
話しかけや顔ですぐにわかった。

黒髪にほんの少し白髪があらつく優しそうな人。

「久しぶり母さん。」

先生の言葉がすこく優しくて何故か目に涙がたまつた。

先生がどんなことを思つていたかがすぐに話し方でわかつた。

「隣にいるのはあなたが傍にいて欲しい人なのかしら？ 隨分若いわね。」

お母様は微笑みながらそう言つた。

きつと私が生徒といつことがわかつたのだろう。

「さすが母さんだな。俺が通つている高校の生徒だよ。」

先生が説明したらお母様は「はいはい。見ればわかりますよ。」
と言つて家に招いてもらつた。

先生に似ている微笑みがすこく優しくて心が温かくなつた。

「お父さんいるからちやんと話しなさいね。」

お母様はそう言つて扉を開けてくれた。

あけた部屋には先生のお父様が座つていた。

「来るとは思つていたよ。お前は生徒に手を出すのか。」

お父様は鋭い目つきでそう言つた。

そんなお父様に先生は少し黙つた。

「俺はこの子じゃないと無理だ。」

先生がそう言つたときには抑え切れなかつた涙が溢れ出した。
私が生徒じやなかつたらお父様は認めてくれたのかもしれない。
ごめんね。
先生。

「俺はこの子が生徒じやなくとも生徒でもどつちじろ好きになつただろ。誰にも譲れない。この子が泣いてるときは俺が支える。俺が弱つてしまつときはいつもこの子がいてくれたし。これからだつてそうだ。だから、一人で歩いていきたいんだ。もう決めている。誰が何を言おうと俺はこの子と結婚する。」

先生ははつきりとそう言つた。

その姿にお父様は驚きを隠せない様子だった。

「お前が自分の気持ちを打ち明けたのは初めてじゃないか? そうか。そうか。この子がえてくれたんだな。だつたらいいだろ。お前が決めたことだからな? それに相手の両親も許してもらつてるなら。何も心配はいらしないな。いいだろ。認めてやる。」

私は泣きながら先生の腕に抱きついた。
こんなに嬉しいことはないだろ。

愛しい人とこれからも歩いていく。
絶対に失わない。
この人だけは。

Hピローグ

「俺のお嫁さん。」

彼はそう言って私の左手の薬指に指輪をはめた。
私は泣きながら笑った。

ねえ、本当の「愛してる」を教えてくれたのはあなたなんだよ?
ねえ、知ってる?

愛してる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8922j/>

愛

2010年10月22日00時53分発行